

茶山先生菅君之碑

茶山のお墓は網付谷にあり、入口には標識が建っている。墓域は長方形(15m)で、二十五基の墓と二基の招魂碑がある。殆どが菅茶山の親族の墓だが、塾生の墓二基もある。茶山先生の御霊屋は木造平屋建瓦葺で、中に墳墓と墓碑が建っている。

先生は文政十年(一八二七年)八月十三日に亡くなった。葬儀は儒教式で執り行われ、墓は養嗣子菅三郎によって建立された。元服時の名前から始まり、廉塾を創り、福山藩儒となったこと、主たる業績、結婚、交友やその風貌、為人まで記されている。撰文並書は頼杏坪(頼山陽の叔父)である。

「神辺ぶらり歴史散歩」(帰南自治会 黒瀬道隆 二〇一七年)より引用

この研究で茶山の父、菅波扶好墓碑の南隣に「岡田快三」(身元不明)の墓の存在が確認された。また、南端の弟子・播州保兵衛が祀られているとされた墓は林多恵子氏によれば、「茶山日記」に記述があり、杜氏として働いていた摂津保兵衛と考えられると。

黒瀬氏の「菅茶山家系譜」並びに「菅茶山墓地配置図」(最新版)を添える。

(原文 漢文 読み下し文)

先生姓は菅、名は晋帥とまのりあひな、字は禮卿、通稱は太中(太仲)、備後神邊の人。父は樗平ちよへいと稱す、諱は扶好ふこう。母は佐藤(半)氏、三男二女を生む。先生はその長なり。樗平翁、頗すこぶる書傳(古典籍)を渉わたる。佐藤氏もまた喜このんで国史を誦じゆし、能よくその子を訓おしふ。

先生未だ弱冠ならずして京師けいしに遊び、那波魯堂なばろどうを師として、洛閩らくびんの學(朱子学)を受く。佐(々木)良齋、中山子幹等と交遊す。既に歸りて郷里に教ふ。後その家の東北に就いて一塾を築く。黄葉山に對す。因りて黄葉夕陽村舎と曰ふ。又茶臼山に近し。故に茶山と号す。備中西山拙齋、同門の故を以て、往来最も密なり。拙齋すでに亡ぶ。傍近諸州の子弟を誨おしへんと欲する者、皆就きて學ばしむ。先生素もとより詩を嗜たしなむ。詩名尤もつと

も高し。福山侯（阿部正倫）初め其の名を聞かず。後聞て大いに驚き、吏に命じて廉問せしめ、乃ち學行兼茂の状を得て、始めて俸禄を賜る。又命じて儒師の員に準ぜしむ。

文化甲子（元年 一八〇四）の春、之を東邸に召す。駕に扈して國に帰る。尋いで命じ福山志（料）を編せしむ。烈祖の廟を修するに及びては、與つてこれを督役す。甲戌（文化十一年 一八一四）又召されて東邸に赴く。丁丑（文化十四年 一八一七）年七十、金を賜ふて壽を為す。前後俸を加ふること三次。文政癸未（文政六年 一八二三）に至りて秩を進めて大目附に比せらる。丁亥（文政十年 一八二七）年八十、章服（紋付）及び魚を賜ふて之を壽す。

是の歳、噎（食道癌）を病み終に起たず。実に八月十三日なり。門人胥議して邑の網付谷に葬る。葬儀は率ね古禮に循ふ。私に諡して文恭と曰ふ。

配内海（為）氏早く亡ぶ。次配門田（宣）氏。先たつこと一年にして歿す。皆子無し。二弟は汝榎・晋葆。晋葆（耻庵）は才敏にして詩を善くす。京に入りて徒に授く、早く歿し後無し。汝榎も亦早く亡ぶ、子あり長作（萬年）と稱す、また歿す。その子惟繩（三郎）は先生に於て姪孫為り。因りて以て菅氏を嗣がしむ。是より先妻姪門田惟隣（朴齋）を養ひて菅氏を冒さしむ。後、その姓に復す。また志摩の人北条讓（北条霞亭）を延て塾の都講と為す。藩召して文學と為す、また先に歿す。河村氏の子退（退蔵・悔堂）を養ひて之を嗣がしむ。初め藩數々將に擧用せんとす。先生、轍ち病を以て辞す。藩も亦敢へて強ひず。特だ禄爵を進めて以て之を優す。晩年生徒益々進み、塾容るる能はず。乃ち藩に請て登せて郷校と為し廉塾と名づく。藩は歳ごとに金を給す。先生すでに俸禄有り。而してその自ら奉ずること極めて儉なり。故を以て家道頗る裕なり。乃ち盡く以て田を買ひ之を藩に納む。蓋し校業の墜ちざるを謀ればなり。

先生為人、軀幹偉にして方面高觀、老に及んで朱顔白髮、之を望むに威有り。而れども物に接して謙和、恂々として田舎の翁の如し。善く談諱し、名の高きを以て、自ら尊大なるを欲せず。貴賤雅俗と無く、皆其の

歎心を失わせず。然れども人情世智に曉通す。暗に淑慝(善悪)を弁ずること截然として欺くべからざるなり。天明飢荒。先生私蓄を出して、里豪に率先し賑救する者再び、邑に糶(買い占め米)を遏むる者有り、窮民まさにその家を毀たんとす。先生その機を察し、父老に諭して以て事無からしむ。又死囚を出だし逮獄を免ずること有れば逋亡(夜逃げ)を招きて、各々其の分を得しむること有り。その經を説くや、一に傳註に循い、敢へて異を立てず、生徒を教ふるに常課有り、必ずしも督促せず、その著作は適用に期す。

詩は尤もその長ずる所にして、努めて實際を叙して苟も作らず。鍛鍊極めて至る。淡雋(俊)穩秀にして、艱苦の態見えず。近世詩体一變する。然もその洪纖(壮大・繊細)を論じ、兼ねて風格高逸なる者を挙げれば、識者独り先生を推すと云ふ。その溢餘(余技)を以て、国雅を為すも、また人の意表を超す。

平素侘の嗜好無し。花竹を種え什器を置く。苟も有れば乃ち止む。酒を喜むも多く飲せず。飯を喫するもまた極めて少なし。多病にして終に寿を得たる者は此を以てなり。

先生鄙僻に在りと雖も、名一時に重し。清末侯(毛利匡邦)過ぎりてその村居を訪う。その東遊するや公侯争うてその面を識らんと欲す。桑名老侯(松平定信)眷遇尤も隆なり。嘗て梅花を折り副に国雅を以て賜る。囑を病むに及んで遥かに秘葉を寄す。昌平三博士(柴野栗山・尾藤二州・古賀精里)以下、諸藩の儒雅を交わりて結ばざるは無し。

著す所黄葉夕陽村舎詩三編凡二十三卷、文稿四卷、遊芸日記、室町志四卷、国字成冊者福山志料三十五卷、冬日影二卷、答問福山風俗五卷、和歌集若干卷。

惟柔(頼杏坪)兄弟夙に親交を辱す。其の疾の病なるに及んでは、遺物を柔に寄せ、副うるに片楮を以てす。自らその二三行、事の人の知るに及ばざる所の者を以てす。その意誌銘を託せんと欲するに似たるなり。柔之を受けて惻然たり。幾ばくも亡くして訃至る。嗣子門人等果して状を奉じ来りて銘を乞ふ。誼辞すべ

からず。乃ち銘に曰く



菅茶山の墓

止まるを知りて能く静かなり、貴ばれざるも奚くんぞ憂へんや。
仁義に功を食しむ、禄を受けて何の尤あらんや。
學は白鹿（洞書院）に開け、齒は青牛に跨る。千首の詩、萬戸侯を軽んず。
是れ其の緒餘なり、道は千秋を照らす。

前大納言正二位藤原資愛卿題額

安芸 頼惟柔撰并書

孝子 維繩立 広島石田儀兵衛直之刻

関連資料

第18号 「墓碑銘解説」

第20号 「菅茶山の墓」